

殺し屋の俺がこんな死に方をするはずがない。

赤井 一人

王が見上げる空と、奴隷が見上げる空は、果たして本当に同じ空なのか。

王は、奴隷は、はるかなる空になにを求めめるのか。

ああ、気分が悪い。教会の空気ってのは体に悪いのかね。それともなんだ、罰当たりはさつさどくたばれっていう神様のおぼしめしってやつ？

……そんな怖い顔するなよ、冗談だよ冗談。ほんとアンタらって真面目だよね。

だから怖い顔するなって、褒めてるんだから。

でもまあ、仕方がないよな。もしも神様から今からお前に罰を与えますって言われても、そら文句は言えないさ。

知ってるとは思うけど、今まで散々殺してきた。飯のため、金のため。そうやって生きてきた。ガキの頃に拾われて、物心ついた時には銃を渡されて、そうやって生きてきたんだ。

俺の世界はそういう世界だった。生きるために殺す。食うために殺す。それが悪いことだとは思わなかったし、今でも思わない。向こうだって殺すために俺の前に立つんだ、殺されたって文句はないだろう。

俺だってそうだ。自分が生きていられるのも、ただの順番待ちってだけ。ただの順番待ちさ。その時が来たら、そんなときや俺の番ってね。

世の中なんてそんなものだ。そんなものだと思っていた。

だけどさあ、二十歳くらいのころ？ 俺のアパートの隣に学生の、若い子が来てさあ。その子、上京したての田舎の子丸る出しっぺいうか、なんていうかい子でさあ。一人暮らしでいいもん食ってないだろうって、なんだかいろいろ作ってきえてくれたりして。

それでまあ世間話とかしたりするんだけど、いやあ、ねえ。やれ学校が楽しいとか友達が出来たとか、あと……彼氏がどうか。

もうね、なんだろうね。

夜中出歩いてて、いきなり宇宙人に声かけられたら多分その時と同じ顔してると思うわ。それくらい住む世界が違うっつーか、これが同じ人間なのっていう。あの子からしたら、俺のことだってそうなんだろうけどね。

俺とあの子は隣同士に住んでいながら、違う星に住む足が八本の宇宙人ほどに違う存在だった。あのとかが初めてだったね。俺たちみたいなのとは違う世界に生きてる人間がいるってことを意識したのは。殺して殺されて、そんなこととは無縁の世界に。そうなりやさ、さすがに俺だって、土足で他人の家に上がるなんてマネはしたくない。だから仕事は選ぶようにはしたよ。

死にたがりだけを殺すようにした。今更だけど、その方がいいかなって。

……そのはずだったんだけどなあ。こういうのって魔が差したっていうのかね。古いなじみに、俺を拾ってくれたあの人に頼まれたら断れないよな。

その結果がこれ。そりゃ、罰も当たるわ。

そうだろ？ 教会に乗り込んで中にいる連中皆殺しにしろって言われて来たら、まさかあんたみたいなシスターさんに風穴開けられるなんて、天罰以外のなんでもないさ。

へ、へ、へ、へ。

冗談としちやありきたり過ぎて笑えるもんでもないのに、なんでこんなに面白いんだろうな。  
……ああ、そういやいたな。俺たちの世界にも訳わからねえ連中がいたよ。

金のため、名誉のため、平和のため、女のため。いろんな理由でみんな人ぶつ殺してたけど、結局は自分のためさ。てめえのたためにてめえの理由でぶつ殺す。でもあいつらは違う。連中は本気だ。本気で思っやがる。

あいつら、神様のために人を殺せるんだぜ？

自分のためでもなく他人のためでもない、誰のためでもない、この世に存在しないもののために、本気で人を殺すんだぜ。そんな理由で——誰も救われやしないのに——よくもまあ。

人の死を前にして神に祈る。そこに人の心の介入する余地が欠片もないというのなら、それはなによりも傲慢な姿だ。

男は血だまりの中で空を見上げる。ガラス張りの天井から差し込む光に目がくらむ。

どこまでも続く空。体が軽くなっていく。このまま魂は空に溶け込んで、新たな世界へと飛んでいくのだろうか。

そう思うと恐怖はない。

あの子は、この空を見上げてなにを思うのだろうか。俺とあの子は、同じ空を見上げているのだろうか。

暖かな日差しを浴びて、男は眠るようにまぶたを閉じた。

一部始終を見届けた彼女は、空を見上げ暫したたずむ。そして、まっさらな心の中で、神に祈り

をささげる。あの空のように、彼女の心には一編の曇りもない。この身も命も、ただ一つのために。信じるべきもののために。故に恐怖はない。

傍らに横たわるライフルを拾い上げ、彼女は歩き出す。血に染めた修道服をなびかせて。

きっと、彼女の心は永遠に満たされることはないのだろう。あの広い空のように。